

2023年度

人権作品集

傍観者

そんな私も

変わるとき

「人権」に関する標語選定作品 中学一年生



人権に関するポスター選定作品

小学3年生



人権に関するポスター選定作品

中学3年生

ふっうって

みんなが同じ

ものじゃない

「人権」に関する標語選定作品 小学五年生

はじめに

名張市・名張市教育委員会・名張市人権啓発まちづくり事業推進会議では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや、偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を、市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学生・中学生・高校生をはじめ市民のみなさまから、作文・標語・図画・ポスター・メッセージの作品を、合わせて一〇、四一〇点応募いただきました。たいへん多くの方々に、人権作品に取り組みいただきました。ありがとうございました。

提出していただいた作品の中には、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、そして学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられているものや、自分自身を振り返り、差別をなくしていくとする姿勢や意欲が伝わってくるものが数多く見られました。

この作品集は、応募いただいた作品の中から、作文十作品、標語十三作品、メッセージ五作品、図画・ポスター二十作品を選定し、掲載しています。本誌を、人権について考えるきっかけとするとともに、さまざまな学習の場でご活用いただければ幸いです。

なお、これらの作品の中から、図画・ポスターの一作品、標語の一作品を人権啓発用ティッシュに、そして、図画・ポスター八作品、標語五作品、メッセージ一作品を二〇二四年の人権カレンダーのデザインとして活用させていただきました。ありがとうございました。

目次

作文

【小学生の部】

- やさしいきもちで
- 友だちにたすけてもらって
- かくしたい自分
- 人の気持ちを知らる
- 「仲間と一緒に」
- 人の親切な心
- ぼくの家族
- 性別で差別がないように

学年	ページ
一年生	4
二年生	5
三年生	6
三年生	7
五年生	8
五年生	9
五年生	10
六年生	11

【中学生の部】

○自分らしく生きられる社会へ

一年生・
1 2

○言葉の重みを胸に

一年生・
1 4

標語

【小学生の部】

・
・
・
1 5

【中学生の部】

・
・
・
1 6

メッセージ「あなたの大切な人へ」

・
・
・
1 7

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

図画・ポスター

【小学生の部】

・
・
・
1 8

【中学生の部】

・
・
・
2 1

作文【小学生の部】

やさしいきもちで

(小学一年生)

わたしは一ねんせいになってから、ところがぼかぼかしたできごとがたくさんあります。

たいいくのあと、きょうしつでともだちがすいとうをとったそうにしていました。わたしはそれにきがついたので、ともだちのすいとうをとってわたしにあげました。ともだちは、

「ありがとう。」

といってくれました。わたしはそれをきいてうれしくなりました。やさしいことをしたらこころがぼかぼかすることがわかりました。だからわたしは、ともだちにやさしいことをたくさんしてもっとみんなとなかよくなりたいたいとおもいました。

べつのひのやすみじかん、ともだちとおにごっこをすることになりました。するとおにごっこをしたそうにこつちをみているのがいました。わたしは、そのこもいっしょにあそべたらいいなとおもって、

「いっしょにおにごっこをしよう。」

といいました。そのこはうれしそうに

「うん。ありがとう。」

といってくれました。そのこがよろこんでくれたので、わたしもうれしかったです。それに、いっしょにあそんだからまえよりなかなることができました。じぶん

からこえをかけてよかったなとおもいました。

またべつのひのやすみじかん、ともだちがおにごっこをしていました。わたしもしたかったので、

「わたしもいれて。」

といいました。すると、

「いいよ。いっしょにしよう。」

とにこにこえがおでいってくれました。じぶんからいうのはすこしきんちようしたけど、ともだちがにこにこしながらいってくれたのでとてもうれしかったです。だからわたしもおで

「ありがとう。」

といいました。そこで、このまえのことをおもいだしました。おにごっこにさそったときあのともだちもこんなきもちになったのかなとおもいました。「いっしょにあそぼう」とじぶんからこえをかけた時、「いいよ」といってなかなよあそんだりすると、こえをかけたほうもかけてもらったほうもうれしいきもちになることがわかりました。

だからわたしは、どうしたらともだちがよろこんでくれるかなとかんがえて、みんながうれしくなるようなことをしていきたいとおもいました。そして、みんなともつとなかよくなりたいです。

わたしもともだちもこころがぼかぼかになって、やさしいきもちでいっぱいになったらうれしいとおもいます。

(小学一年生)

学校がおわつてびょういんに行きました。みてもらうと、まつばづえをつかうことになりました。

「足、大じょうぶ。さんぷり、だしてこようか。」

と言いました。べつの友だちは

と言つて、すいとうをきまつたばしょにおいてきてくれました。ほかにもたくさんの方たちが声をかけてくれました。わたしは、とてもうれしい気持ちになりました。

「まづばづえをつかいながらうごいたら、ひもとかひつかかるかも」と心ばいはありました。だけど、じ分のこととはみんなじ分ではないし、わたしもじぶんのこととはじ分ではないと思つて、すこし歩きました。すると、友だちが、

と言ってくれました。わたしは、

と言いました。そして、せきにもどつた時、わたしのつくえの上に、わたしのすいとうが置いてありました。だれがおいてくれたのか分かりませんでした。この時、とても心があつたかくなりました。

5

かくしたい自分

(小学三年生)

わたしは、学校に行きたくない時がありました。理由は、休み時間、「いやや。」「あつちいつて。」と言われて、なかまはずれになることがあったからです。そのときは、一人で休み時間をすごしていました。「みんなといっしょに遊びたいな」と思って暗い気持ちでした。本当は自分の気持ちを相手に伝えたいけど、きらわれたくないから言えない自分もいました。どうしてもいやだったので「いっしょに遊びたい」ということを書いたお手紙をわたしました。そうすると2、3日は遊べるようになったけど、またすぐにもどってしまいました。

ある日、学校を休んで、友だちとなかよくすごすために、自分がどんな行動をしたらいいのかをお母さんといっしょに考えました。そして、相手に自分の気持ちを伝えることにしました。

次の日の朝これまでにいやだったことを伝えました。すると、すぐにあやまってくれました。そしてわたしがいやなことをしていたことを教えてくれました。それは、わたしがすぎな遊びをしていたり、すぐにおこってしまったたりするところです。そのことに自分は気づいていなくて、知らない間に友だちをきずつけてしまったと思います。

これをきっかけに、今までをふりかえると、遊ぶ気はないのにうそで遊ぶ約束をして、その場所に行かなかったことや、なかまはずしをすることがありました。思い出す中で、まだあると思っていました。が、なかなか思い出せないことがありました。言葉がきつくて、相手にいやな思いをさせてしまったかもしれないということとも思い出しました。三年生になって、友だちに「○○ちゃん(わたし)

し)のことがこわい」と言われることがありました。思われていたことを初めて知りました。

ふりかえっている時間、わたしは、何も言えずにだまっていることが多くありました。先生と話をしても、お母さんと話してもなかなか言葉が出てきません。でも、それは、考えていなかったわけではありません。わたしの中に「だれにも知られたくない自分」がいたからです。ともだちにいやなことをしているとことかいじるをしていいる自分を知られて、くわしく聞かれて、だめなことをしている自分を知られるのがいやだったからです。頭の中では分かっているのに、わたしの中に「かくしたい自分」がいてなかなか言葉がでませんでした。とても長い時間、先生と話をしました。たくさん泣きました。ある時、ゆう気を出して先生に「かくしたい自分」のことを話すことができました。とてもすっきりしました。友だちに対してやさしくしていきたいと思いました。先生には安心して言えたので、お母さんにも言いたいと思います。でも、友だちに言うことはまだまよっています。友だちは、「かくしたい自分」をもう知っているといます。なぜなら、わたしがいやなことをしているということをお母さんの顔から感じ取っていたからです。けれど、友だちにこのことを伝えると、きらわれてしまうかも知れないのでとても不安です。でも、このままかくしていてもよくならないと思っています。いつかぜったいに伝えたいと思っています。けれど、今はできないので、もつと相手のことを考えて行動できる自分になれたとき言いたいと思います。そのために相手の表じょうや行動を見たり、何が言いたいのかなと考えたりして、行動をするようにしていきます。

人の気もちを知る

(小学三年生)

そう合の学習で、市民センターに行きました。みんな歩いていきました。市民センターに着きました。階段とスロープがありました。ぼくは、階段を使いました。スロープがあつたので、ぼくのおじさんには、べんりだなあと思いました。なぜなら、ぼくのおじさんは、歩くことができます。したいふ自由というしうがいを持っているそうです。いつも車いすに乗っています。家に行ったときは、おじさんは、手すりやかべを使って、いどうしています。ぼくがいつも、かんとんにしていることが、おじさんにとっては、とても大へんなことなんだなあと思っています。でも、おじさんはいつも元気でニコニコしています。しんどいことがあつても、あきらめず、さい後までがんばっています。二年前くらいに、おじさんに、

「しんどくないの。」

と聞いたことがあります。すると、

「できないことの方がたくさんあるから、できることは、ぜつたいにあきらめへんよ。」

と言っていました。ぼくは、それを聞いた時、とてもかつこいいと思いました。ぼくは、おじさんの言葉を聞くまで、あたり前にできることができない人がいるということを考えたことがありませんでした。そして、できないことをあきらめないことは、大切だと思いました。ぼくは、これから、いろいろなことをがんばろうと思いました。ぼくは、べん強をすることがすきです。でも、むずかしくて、わからないこともたくさんあります。むずかしくてわからないと、あきらめて「いや。」と思うこともあります。が、がんばっていききたいと思いました。

ぼくは、車いすをおしてあげようと、

「おしてあげるよ。」

とおじさんに言ったことがありました。おじさんは、

「自分でおすよ。」

と言ったので、ぼくは、車いすをおしませんでした。ぼくは、おじさんの車いすをおしてあげたかったです。車いすの人には、手つだってあげることがいいことだと思っていたからです。おじさんの「自分でする。」という言葉で、人によつて助けてあげることが、ちがうのだと思いました。家族や友だちなど助けてあげたいときは、声をかけています。ぼくは、お母さんが、しんどい時や頭がいたい時などは、一何か手伝おうか。」

と、まず聞いています。そして、お母さんが、

「おねがい。」

と言ったら、あらいものをしたりせんたくものをたたんだりそうじをしたりしています。困っている人がいたら、その人の気もちをまず知ることが大切だと思っています。

「仲間と一緒に」

(小学五年生)

私は、悪口や差別を見たり聞いたり自分がしたときに、話にうなずいてしまったり、見て見ぬふりをしてしまったりすることがあります。人権のお話を聞いているのに、ダメだと分かっているのに、いつも知らんぷりをしたり、話に合わせてしまったりします。中にはそれを見て聞いて、止める子もいるけど、その子のことと自分はすごいなと思うだけで、行動にはうつせません。とてもダメだし、かつこ悪いです。

よく、見て見ぬふりをすることは勇気が足りなかったと言います。しかし、私はいじめを許しているから見て見ぬふりができるのではないかと思っています。

今の私は、声かけするときもあるけど、たまにしかできません。だけど、そのたまにの声かけで一度自分にいじめを止める自信がついたことがあります。

大掃除の時でした。机をふくように先生にお願いされた二人のうち一人が、

「こいつの机はめっちゃきたない。きたないばいきんがついているからさわりたくない。」

と、相手が悲しむようなことをずっと言っていました。そしてもう一人の子もそれにつられて、きたないなどの発言をしながら二人で笑っていました。私はそれを聞きながら二人はどうしてそういう発言をしているのだろうと思っていました。この時もダメだ

なと思えませんでした。やっぱり声かけするのは自身がなかったからです。

しかし、だんだん二人の悪口はヒートアップしていきました。

私はこの時、本当に声かけするかしないかで迷っていたけど、このまま悪口を見逃し、見て見ぬふりをするとはいじめを許していることと同じで、あの時なぜ声かけできなかったのだろうと後悔すると思い、思いきって声かけをしました。

「ばいきんあつかいなんてみつともないことやめなよ。」と言いました。すると二人は、

「ばいきんあつかいなんてしていない。」

と言いました。心の中ではうそつくなと思っていたけど、そこまですいませんでした。注意なんてしなければよかったと思っていました。しかし後で、周りで見ていた子たちが、

「注意してくれてありがとう。」

と言ってくれました。とてもうれしかったです。声かけするって勇気がいるけど、こういうことを言ってくれる仲間がいると声かけしやすいなと思い、少し自信ができました。

この出来事から私は、勇気をもって何かをするというのはとてもいいことだなと思いました。でもいつも声かけできるとは限りません。声かけがもしできなくても、どう対応していくかが大切だと思います。仲間や先生、おうちの人など周りの人に相談し、仲間と一緒に声かけすることはできます。

これから、みんながおもいを伝え合い、差別をなくす仲間になっていきたいです。

人の親切な心

(小学五年生)

私は、三年生の時に一度消しゴムが無くなったことがあります。初めは、自分が無くしたのかなと思いました。しかし、思い返しても筆箱に入れたように思うし、どれだけ探しても見つかりませんでした。

そこで、先生に相談すると、みんなで探すことになりました。すると、ふつうに考えてぜつ対ないだろうと思える、本だなの箱をどかせた一番後ろにはさまっている状態で私の消しゴムが発見されました。

わたしは、消しゴムが不自然な場所にあったことで、私の心には、「だれかが私の消しゴムをかくしたのではないのか。」という思いがわきあがってきてしまいました。

それからというものの、私の頭の中では「だれがかくしたの。」でいっぱいになってしまいました。クラスの仲間や仲の良い友だちをうたがいたくないのに、うたがってしまう自分がいて、そんな自分がいやでとてもつらかったことを今でも覚えています。

五年生になり、一ノ井児童館の藤本さんから人権についてのお話を聞く機会がありました。

そのお話の中で、細かい部分はちがいますが、友だちをうたがってしまうことがつらいというお話をうかがいました。その事を聞いたときに、三年の時の自分の気持ちがよくえりました。そして、人をうたがうことは、だれしもつらいことなんだということに気がつくことができました。自分でも、「もう二年前のことなのに、すぎたことなのに。」と思いつつも、つらい気持ちが残ってい

ました。

その一方で、前向きな気持ちを発見できたお話も藤本さんからうかがうことができました。それは、自分のそばによりそってくれる人もたくさんいるんだということです。

私の消しゴムの時にも、クラスみんなが自分のことのようにいつしよに探してくれました。その時のみんなの親切な行動には、人のあたたかさを感じることができました。

その時、支え合える、助け合える仲間っていいなと思うことができました。

私は今、五年の人権学習を通して、改めて人権について考えています。

人権は、全ての人にとって平等で、大切な権利にもかかわらず、いつの間にかうばわれていたり、守られなかったりしていることがあると思います。

だれかが笑っている一方で、世の中にはつらく、悲しい思いをしている人もいるのだと思います。

そのことに気づけたので、私はこまっている人や悲しんでいる人を見かけたときには、自分からやさしい声かけをしたいです。

そして、こまり事や悲しさの原いんをなくしていけるように、手を取り合って具体的な行動をしていきたいです。

ぼくの家族

(小学五年生)

ぼくのお母さんは日本人で、お父さんはかん国人です。ぼくはその事を小さいころから自然に知っていました。小さいころからかん国によく行っていたし、家族のみんなでもよく話をしていたからです。ぼくはお父さんが、かん国人だという事をすごいな、ちよつとうれいなど思っています。

五年生の社会見学で大阪のつる橋のコリアタウンに行くとき、お父さんが子どもときどんな所で暮らしていたのを見ることができたから、うれしくなりました。キムチや十円パンやいろんな種類のぶた肉が売っていました。焼き肉のレストランもたくさんありました。この夏にかん国に行ったのですが、よく似た街なみでした。家でお父さんに話したら、なつかしいなど言っていました。

その後、コリアNGOセンターで、在日コリアンのカク・チヌンさんに、コリアタウンの歴史や、ご本人の事を聞きました。カクさんは、自分が在日コリアンということをしつとかくしていたそうです。ちがうということで、なかまはずしされたり、差別されたりしたらいやだと感じていたからだそうです。そのときぼくは、お兄ちゃんのことを思い出して、すぐドキドキしていました。ぼくのお兄ちゃんが言われたことを思い出したからです。お兄ちゃん、高校生のときに、クソかん国人と言われたのです。ぼくは、それを聞いたとき、うわあいやだなあ、ひどいな、自分も差別されるんじゃないかと心配になりました。

でも、カクさんの話の続きを聞いてホッしました。カクさん

が高校生のときに、明るくて、たよりになる先生が来ました。みんなその先生の事が大好きでした。その先生がある日、みんなの前で自分は在日コリアンだと堂々と言ったそうです。カクさんは、周りちがうことをよくないと思っていたけれど、その先生と出会って、話を聞いて、「ちがう事と出会う事によって、自分のものの見方が豊かになる」と思うことができるようになったそうです。そして自分に自信をもてるようになって、自分の事をみんなに言ったそうです。ぼくもそれを聞いて勇気がわいてきました。

ぼくは自分の家族のことを考えました。ぼくたち家族はなんでも話しています。みんな自分のルーツを大切にしています。お母さんは、自分のルーツがはっきり言えなかったら、そわそわして生きるのがしんどいやろと言っています。お父さんには差別はまだある、だからこそ差別をする人になるなよと言われています。お兄ちゃんも、差別に負けずにがんばると言っています。クラスのおみんなはぼくの話がたくさん聞いてくれます。ぼくもおかしいなと思うことはだめだと言っていきたいです。家族やクラスのみんなと、差別をなくしていきたいと思います。

性別で差別がないように

(小学六年生)

私は、5年生のとき、総合的な学習の時間の授業で、性別について学びました。そこで学んだことは、「みんなの顔が一人ひとりちがうように、みんなの心の性別も一人ひとりちがう」ということです。これを聞いたとき、最初は「え？」と思ったのですが、学んでいくうちに、「確かに。みんなの心の性別はちがうのかも……」と思うようになりました。そう思ったのは、女の子でも、心の性別はちがうかもしれないし、男の子でも、心の性別はちがうかもしれないということを学んだからです。

このような人達をさげすむ言葉があり、そう呼んではいけないということも分かりました。しかし私は、そのようなことを言ってしまったことがあります。何年か前の話ですが、男の人が女の人の格好やマネをしている姿を見て言ってしまったので、笑ったり、自分ではこれが差別をしていると思っていなかったもので、笑ったり、おもしろいからという理由で言ってしまったのでした。どうして男の人が女の人の格好をしているんだろうかと思いながら、理解できずに言っていたと思います。私は学習を通して、今、自分がしてしまった行動をふり返ってみました。その行動は、相手の個性を認めていない発言で、直接その人に言っていないくても、それは差別だということも分かりました。私は、性の多様性について学んでよかったと思います。学んでいなかったら今でも気づかないうちに、相手を傷つける言葉を言っていたかもしれないし、相手がきずつく行動などをしていたかもしれないからです。

このようなことをふり返ったり、性別の学習をしたりすること

で私は、人を見た目で判断しなくなりました。みんなの心の性別はちがうかもしれないしな、と思いながら生活することも少しできるようなりました。だから、テレビをみながらその人のことをばかにしている人に「言ったらあかんで」と、注意することもできるようなりました。少し自分も成長したんだな、と思いました。

みんなが過ごしやすくなるためには、いろんな人を認めることが大切です。そんないごちの良い学級にするためには、みんなが相手の気持ちを考えてたり、自分の行動をふり返って考えたりしたらいいと思います。このようなことをすれば、いやな思いをする人が少なくなつて、とてもいい気持ちになれると思うからです。私も学習をして自分の行動をふり返り、まちがったことに気づけたので、これから相手の気持ちも考えた行動ができるように学んで成長していきたいです。

作文【中学生の部】

自分らしく生きられる社会へ

(中学一年生)

私は、以前にヘアドネーションをしたことがあります。ヘアドネーションとは、髪を寄付することです。寄付された髪の毛は、何らかの理由で髪に悩みをもつ子どもたちのために、ウィッグにして無償で提供されます。私がヘアドネーションをしたNPO法人では、しっかりとウィッグを作るために31センチメートル以上の髪を集めていました。31センチメートルの髪でできるウィッグは、ショートヘアから、ボブスタイルの短いウィッグになるそうです。ロングヘアのウィッグを作るには、とても長い髪が必要となり、ロングヘアのウィッグはとても貴重です。私は髪を伸ばすことも切ることも自由に選べますが、医療用ウィッグを待っている子どもたちは髪型を自由に選ぶことができません。ロングヘアのウィッグを待っている子に届くといいなと思います。髪を切りました。

ヘアドネーションをするのにあたり、私はヘアドネーションについて色々調べました。ヘアドネーションは女の人だけじゃなくて男の人もあります。髪が長い男の人は目立つので、「どうして髪が長いのか」と質問されることが多く、ヘアドネーションを知ってもらおう宣伝になるそうです。しかし、「髪が長い男の人は変だ」と言われてしまったり、長い髪をジロジロ見られて悲しい気持ちになることもあるそうです。

どうして、男の人は髪が長いと変な目で見られてしまうので

しょうか。校則や部活の決まりで男の子は短髪と決められている場合もあります。私の中学でも髪が長い男の子はいません。友人に髪が長い男の子はいますが、よく女の子と勘違いされたり、「あの子、男の子なのに髪が長いんだね」とよく言われます。本人が好んでしているから、別にいいのにと私はいつも思っています。確かに前髪が長すぎたり、活動に邪魔になるヘアスタイルをしているたらよくないと思うけど、それに気をつけて髪を伸ばしているんだったら、男の人でも女の子の人でも自由に髪を伸ばしてもいいと思います。それなのに、どうして男の子は髪が長いと変だと言われるてしまうのか疑問に思います。

ヘアドネーションをした男の人の中で「今は女の子は髪が毛があることが普通だけれど、そうではなくなる日が来る。『ウィッグをつけるのも、つけないのも、別にいいじゃん。好きなようにすれば？』ってなる。」と言っている人がいました。女の子だって、短い髪が好きだったら短くすればいいと思うし、坊主の女性モデルさんも、とてもおしゃれでかついいと思います。

私の長い髪を見たお母さんが「せっかくだからヘアドネーションをしてみたら？」と勧めてくれたからです。私はその時に、はじめてヘアドネーションという言葉を知りました。そして、病気で髪の毛がなくなってしまうなんて「かわいそうだな」と思いました。しかし、ヘアドネーションについて色々調べていくうちに、「かわいそうだな」と思うことがウィッグを必要とする理由になつてしまうことに気がつきました。

ウィッグを希望する理由のなかには、「周りの目が気になるから」という理由もあるそうです。髪やまゆげがない人を見て「病気のかな、かわいそうに」と思ってしまう心がその人たちを苦しめ

てしまうようです。手や足がない人を見て、「かわいそう」と思っ
てしまいがちですが、その人自身が「自分はかわいそう」と思っ
ていなかったら、かわいそうな目で見てしまう事はとても失礼な事
なんだなと気がつきました。

髪が少し抜けただけで、とても気にする人もいれば、すべて抜
けてしまっても、全く気にしない人もいます。人の痛みは人それ
ぞれです。「かわいそうだからしてあげる」のではなく、「必要と
しているからする」がいいのかなと思いました。その気持ちが広
がっていけば、ウィッグをつけるのもつけないのも、個人の気持
ちで決められるようになるし、髪が長くても短くても、「自分らし
さ」でお互いに気持ちよく過ごせる社会になったらいいなと思
います。

言葉の重みを胸に

(中学一年生)

私は、小学一年生の時に、外国の日本人学校に通っていました。その学校は、当時人数がとも少なかつたため、すぐにたくさんの人と仲良くなることができました。その中にAさんという、わたしより二つ年上の子がいました。Aさんは生まれつき片方の耳が変形してしまっている子でした。私がそれを知ったのは、合同での授業の時です。当時の私は、Aさんの耳を見て不思議に思いました。そして、こんなことを言ってしまったのです。

「Aさんの耳どうしたの？変な感じだね。」

Aさんはきつと、とまどってしまっただろうと今なら思います。私は、それを聞いていた近くの先生に呼びとめられ、離れた所で話すことになりました。その時の私は、先生に呼ばれた理由がわからず、Aさんの顔も見ることができませんでした。連れていかれた先で先生は私を強く責めることはしませんでした。ただこう言いました。

「あなたは、自分と違った目の色をした人を見ても変とは言わないだろう？」

私はその時、口に出して言うべきではない事をAさんに向かって言ってしまった事に気づきました。どうして、自分と違う目の色の人を見ても特に何も思わないのに、自分と違う耳の形をしたAさんには過剰に反応したのだろうとかうかいしたと同時に、いくらAさんの耳のことを知らなかったからとはいえ、その無知を「変」だと言葉に表現し、Aさんを困らせてしまったことを恥づかしく思いました。そして、まだ一年生だったから、Aさんを傷つけるつもりのことばじゃなかったし：そういった言い訳で片付

けられるほど、私のしてしまった発言は、簡単なものではないのだと自覚しました。

私は、人権について学んでいく中で、「言葉は、ナイフにもなる」という言葉に出会いました。これは、人に対する暴言や誹謗中傷など悪意のある言葉で、人を簡単に傷つけることができるという意味です。それくらい、言葉というのは軽い気持ちであつかつていいものではないのです。そして、言葉は受け取る人によって、感じ方が変わります。感じ方が変わるといことは、自分の伝えたいことと違う意図が、相手に伝わるということでもあります。もちろんこれは、ネット上など直接的な言葉のやりとりではない場合でも同じです。むしろ私は、ネット上の方が相手の意図を読み取りにくいため、対面してのコミュニケーションよりも、言葉の誤解が生まれやすいのではないかと思います。

一度言った自分の言葉を、取り消すことはできません。冗談のつもりで言った言葉、無意識に口から出た言葉、悪気なく出た言葉。私がAさんに言ってしまった言葉も、この先私の中で残り続けるでしょう。だからこそ、自分の言葉に責任を持ち、うかいしないような言葉選びや伝え方が大切なのだと思います。言葉は、人と人がつながるための手段の一つです。いろいろな表現の仕方があり、使い方によっては、簡単に人を傷つけることもできます。でも言葉は、そんなことのためにあるものではありません。誰かが人から言われた言葉に傷ついたということは、誰かが言葉の使い方を間違えたということなのです。私も、間違った言葉の使い方をしてしまった人の一人です。いくらそれをうかいしても、決して、過去の言葉を無かったことにはできないけど、今やこの先に向けて、改めて言葉の重みを胸に、人との関わりを見直していきける人に、世の中になつていけたらと思います。

標語

【小学生の部】

- ・ふつうって みんなが同じ ものじゃない
五年生
- ・気付いてよ 差別は人を 追い詰める
五年生
- ・勇気だし ぼうかん者から ぬけだそう
五年生
- ・考えて 送信ボタン 押す前に
五年生
- ・見てるのに 見て見ぬふりは おかしいよ
五年生
- ・「いじめダメ」 言ってるだけで ちゃんとできてる？
五年生
- ・「無視しよう」 その行動が 生む差別
六年生
- ・考えよう 自分がされて いやなこと
六年生

【中學生の部】

・傍観者 そんな私も 変わるとき

一年生

・見て見ぬふり 誰かの一瞬 誰かの一生

一年生

・摘み取ろう 心のどこかに 差別の芽

二年生

・なぜみんな 同じでなければ いけないの？

二年生

・自分はしてない 見てるだけ それも立派な差別です

三年生

メッセージ「あなたの大切な人へ」

最優秀賞

「おかあちゃん」へ

幼なかつたけど覚えています。貧しくてごはんが少ない時貴女は食べずに私達に食べさせてくれました。遠足の前夜古い毛布をほどいてセーターを編んでくれました。茶碗を割ったら瀬戸物屋が喜ぶと言ひ、傘を忘れたら雨が降らず良かったと言ってくれた母、ありがとう。そのお陰で今の私があります。もう一度会いたい。 (一般)

優秀賞

「先生」へ

私の大切な人は、中学校の時の先生です。何をするにも応援してくれたり、困った時には背中を押してくれたりする優しい先生です。毎日笑顔で自分の仕事に誇りを持っていて、誰からも信頼され、人を助けられる、そんな先生みたいな大人に、教師になりたいです。夢をくれた先生に感謝です。 (高校1年生)

「地域の方々」へ

私が感謝したい身近な人は地域の方々です。いつも私が知らないところで地域を盛り上げるための行事を考えてくれたり、通学路を安全に歩けるように草を刈ってくれたりします。そのおかげで私は今快適に暮らせています。普段直接感謝を伝えることが出来ないなのでここで感謝を伝えたいと思います。 (高校1年生)

「71才のお母さん」へ

病気がわかった時、大丈夫大丈夫私は大丈夫と気丈にふるまっていたね。娘である私は病院をでた後、涙がとまらなかったよ。今まで1度も涙を見せず、生きている喜びをかみしめながら、「ありがとう通院は1人でいける」と常に言う母。1人ではいかせない。絶対何があってもそばにいるからね。いさせてね。 (一般)

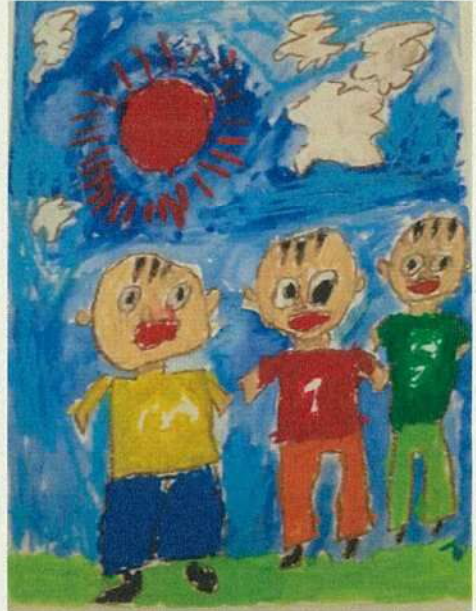
「愛する我が子」へ

生まれてきてくれてありがとう。いつも叱ってばかりでごめんね。子どもたちで仲良く遊ぶ姿を見るたびに反省しているよ。いつまで抱っこして、手を繋ごうと甘えてくれるかな。賑やかで楽しい毎日をありがとう。ずっと大好きだよ。 (一般)

図画・ポスター 《小学生の部》



1 年生



1 年生



1 年生



2 年生



2 年生



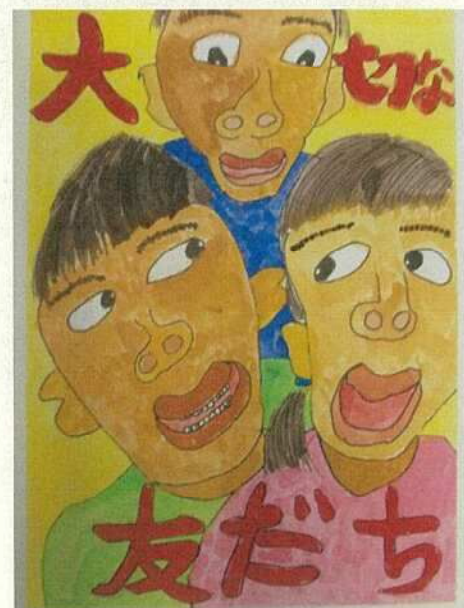
3年生



3年生



3年生



4年生



4年生



5年生



5年生



5年生

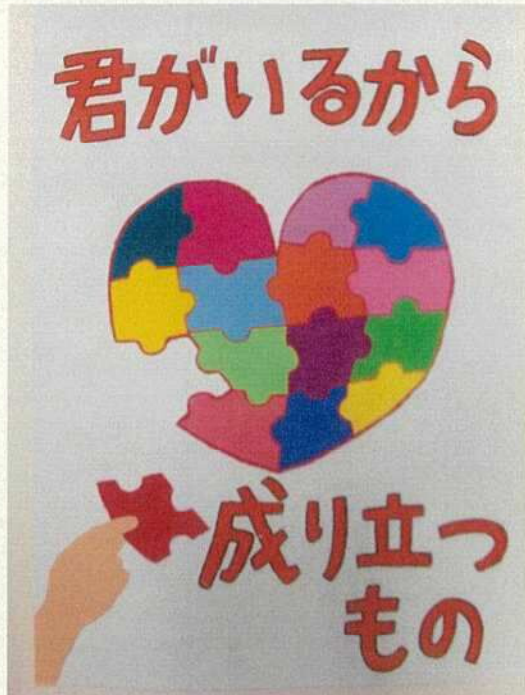


6年生



6年生

図画・ポスター
《中学生の部》



3年生



2年生



2年生



3年生



3年生

人権尊重都市宣言

すべての人々の人権が尊重される自由で平等な社会の実現は全世界共通の願いである。

しかしながら、現実の社会生活においては人権が侵害される事象が依然として存在しており、これを解消することは私たち全市民に課せられた責務である。

よって、当市議会は、あらゆる差別を撤廃し、すべての人々の人権が保障される明るく住みよい地域社会を実現するため、ここに人権尊重都市宣言を決議する。

平成 3 年 3 月 27 日

名張市



名張市子ども条例に基づく「ばりっ子会議」
考案キャラクター なばりん

—人権作品集—
2024年2月発行
名 張 市
名張市教育委員会
名張市人権啓発まちづくり事業推進会議

この冊子は再生紙を使用しています。